特別活動部会

＜県研究主題＞
望ましい集団活動を通して,生徒一人ひとりの自主的、実践的な態度の育成と
豊かな人間関係をはぐくむ指導の充実と、評価の工夫・改善

提案１　　提案者　米田　沙織（横浜地区）

＜研究主題＞
横浜型小中一貫教育の推進
～「横浜版学習指導要領」に基づくカリキュラムマネジメントの充実～
～子どもがよりよい生活や人間関係を築くための指導と評価の在り方～

１　提案内容

（１）　提案の趣旨

委員会などの集団によって、学校生活上の課題を協力し、解決する力を付けるための活動過程（計画→準備→実践→振り返り）における適切な指導と助言の在り方について提案を行う。

（２）　小中一貫教育の視点から

小中学校間における組織や所属、活動の仕方の違いを理解した上で、子どもたちの資質・能力を系統立てて育てることを目指し、児童会と生徒会の交流を年４回実施している。小学校での先行経験を踏まえて中学校で生徒の自発的、自治的な態度を育てるためには互いの活動に関心をもち、取組を共有することが大切である。

（３）　指導事例「ありがとうを形に」（生徒会活動）

①　活動のねらい

メッセージボードの作成を通して中学校３年生への感謝の気持ちを表す方法を考え、学校全体の生徒会組織を活かして、協力してよりよいものを創りあげようとする自主的・実践的な態度を育てる。

②　活動過程における教員の支援（資料より抜粋）

ア　計画の場面…活動の意義を考え、昨年度の振り返りから課題を見付けることができるよう助言。

イ　実践の場面…自分たちの思いが実現できる方法を考えることができるよう助言。

（４）　考察

活動を振り返る場面では、子どもたちの活動意欲や生徒会活動に対する参画意識によりよい変化が見られた。このことから、活動におけるねらいや評価規準を明確にするとともに、活動過程における適切な助言をすることによって、子どもたちに学校生活上の課題を協力して解決しようとする力を付けることができると考えられる。

２　協議内容

①　小中学校間での指導方針の共有化について

月に１回程度、児童会（生徒会）指導部会を開いて指導内容について共有を行ってい

る。また、職員の中には同校内の小学校から中学校へ異動した者もおり、引継ぎがしやすい面もある。また、他の小学校から本校の中学校への異動もある。また、中学校経験のある教員が小学校の児童指導も行っている。

② 小中学校間の環境の違いについて

小中学校では違いはあるが、創立６年目を迎えており、互いの校種を理解しようとする環境が少しずつ整ってきている。

③ 活動の振り返りについて

アンケートやワークシートの形で実施することが多い。振り返りの方法については 「前にこんなことやったよね。」など、子どもたちの経験を引き出しながら行っている。

④ ねらいや評価規準についての児童会や生徒会の担当外の職員との共有

指導部の打ち合わせ時間を利用している。十分な時間が取れているとは言えず、今後の課題としたい。

⑤ 評価について

振り返りの中で「次も頑張りたい」は関心・意欲として評価し、「計画の立て方がわかった」は知識・理解として評価するなどしている。

⑥ 生徒会の担当者と担当外の職員間の意識の共有化について、生徒へのはたらきかけについて

生徒が自分たちの力で運営しようとしている点が素晴らしい。共有するための資料等があるわけではないが、生徒主体の話合いとしつつも、複数の職員で話合いの場につくことで軌道修正のタイミングを見極めるようにしている。

３ まとめ

（１） 特別活動の意義について

特別活動は日本の特徴的な活動であり、海外からもその教育課程に注目が集まっている。「活動ありき」にならぬよう、教員が「付けたい力」を明確にすることが求められる。

（２） 「望ましい集団活動」、「よりよい学校生活づくりに参画する」について

指導要領に示されている「望ましい集団活動」について今一度確認を。社会参画の力や自治的能力を養う上で、自分たちで集団決定し実践するという経験は重要であり、今回の提案はまさにこれを意識したものであると言える。

（３） 小中連携について

これからの小中連携の推進にあたっては、

①特別活動の目標が共通であることを理解する

②「何を」「どのように」やっているのかを共有する

③自分の担当する活動で何を変えていけるのかを考える

の３点を意識することが大切である。

提案２　　提案者　加藤　彩子（県央地区）

＜研究主題＞

主体的に取り組み、豊かな人間関係を育む学級活動の充実

～生徒たちが創りあげる話合い活動を通して～

１　提案内容

本研究会の主題に基づき、相手の考えや意見をしっかりと聴いて思いをくみとったり、多様性を受け入れ認め合ったりする「学級会」での話し合い活動について発表された。

（１）　実現のための手立て

①　豊かな人間関係を育成するための工夫＝自己肯定感を高め、意見や考えを言いやすい環境づくり

②　一人ひとりの意見を生かす話合いの工夫＝意見や考えを最後まで聞き、それに対しての自分の考えを持った話し合い

③　主体的な話合い活動の準備と充実＝アンケートの工夫、班長会議における生徒による結果の分析と報告、それらを踏まえた議題設定と事前周知等の準備

（２）　実践内容

①　第１回学級会では、学級全員にとって、「自分の考えを持ちやすい、自分の考えを発表しやすい、自分と違う考えであっても受け入れやすい、話合いがしやすい」という４つの理由から、題材で「学級目標」を扱った。

＜学級目標＞

ア　自信を持って自分の考えを伝える態度、級友の考えを聞き共感する態度を育てる。

イ　協力して話合いを進めようとする態度を育てる。

ウ　これまでの学級活動を振り返り、以後の生活を大切に過ごそうとする気持ちを育てる。

②　第２回学級会では、次のような準備を行ったうえで話し合い活動を深めた。

ア　事前の班長会

学級アンケートの実施。分析。議案の立案。当日の流れや役割分担の打合せ。

イ　学年内・他学年での同じ題材での学級会

授業見学や助言をもとに、２回目の学級会に向けての準備の実施。

③　事後指導では、これから頑張っていきたいことを学級会個人ノートに書かせ、生活班に分かれ個々の行動宣言を付箋紙に書き込み、班で話し合ってまとめ、それを模造紙に書き込んでいくという作業をさせた。

（３）　成果

①　学級会を通じて、班長会を活用して生徒たちの悩みや困り感を探り、学級のアンケート結果によって、生徒自身が「学級で困っていること」の内容を認識できた。

②　「発言しやすい環境」と「実現の方策」について話し合わせ、具体的な意見を出すことができた。

③　事後指導によって，生徒たちの行動も、行動宣言に沿って仲間を大切にしようという雰囲気が高められた。

２　協議内容

（１）　話合い活動について

グループエンカウンターなどを活用して話しやすい環境をつくっている。グループエンカウンターは、学期に１度の頻度で継続的に行うことで効果が上がっている。話し合い活動を重視しているが、個別支援が必要な生徒には、別のアプローチをしている。

（２）　学級内組織での生徒個々の関わり方について

年度初めでは、学級会議長団を設定していなかったため、生活班と係の相関が十分に図られなかった。そのため、学級への所属感が持ちにくい環境であったと考えられる。行事に関する「学級での話し合い」は多く設定することによって、話し合いのルールの定着等、スキルアップが図れた。

（３）　学級会の課題を考えさせる機会設定について

学校での話し合いの時間設定を増やすことは困難であり、前日までに配布プリントを用意し、事前課題として生徒に配布した。このことにより、生徒一人ひとりが基本の考えを持とうとすることで発言が増えた。事前に自分の立場を明確にできたことで、説明が分かり易くなった。

授業改善や席替えなど生徒のもつ情報を生かせる内容も議題として扱えると思う。さらに、話し合いのルールやセリフ例をプリントして配布したことにより、生徒主体の活動になりやすかった。教員が結論に誘導するような指導も避けるべきだと考える。

（４）　評価について

前向きな評価をし、次年度に繋がるように配慮した。学年全学級で同一の議題を同じ流れで取り扱うようにしたことで、次年度の話し合いはスムーズに行える。

（５）　学級会後の話し合いの成果を感じる事例について

年度末の球技大会の練習で、男女交流が活発になった。また、話し合いでの発言が増加した。次年度になっても生徒自身の考えを明確に発言することが多くなっており、お互いを認め合う場面が増えている。

３　まとめ

学級の状況を振り返るために、テーマを「学級づくり」に設定したのがよい。

本研究は、生徒の状況を科学的に分析しようとする姿勢で臨み、仮説を立てて、具体的な手立てを講じている。その中で、生徒個々の目標を立てさせていたのが、課題解決に有効だったと考えられる。

研究をより発展的に見るならば、学校研究として３カ年間を見通せるテーマ設定にしていくと良い。生徒個々の変容を追跡しながら、生徒の居場所づくりから必要感へ、さらに集団への所属感に深化していくような指導を望みたい。また、構築された「望ましい集団」がどのような活動に機能していくのかまで考えたい。